

俳壇 読売

高野ムツ才選

紐あれば忽ち猫の手の世界
東佐野市 布野 寿

【評】紐に飛びつく子猫は愛らしい。しかし、狩に生きる動物の本来の姿でもある。その紐一本に簡潔明瞭に言い止められている。古墳田も埴輪の列に春の雷

向日市 山田 正則

【評】おそらく復元された古墳に配置された埴輪だろう。しかし、折からの春雷の音が、そっくりそのまま古墳時代へワープさせてくれる。落椿音を残して動かさる

徳島県 曾我部幸子

【評】落椿の音は、地に落ちた瞬間に生まれ、瞬時に消える。だが、こう表現されると椿とともに音までも、ずっとそこに残っているかのようだ。言葉の力技というもの。オートバイ止め満開の桜かな

川越市 大野有之介

蛇穴を出でて陸舟や廃村や
郡山市 寺田 秀雄

拾ひ読み書き抜き花の真つ盛り
東京都 望月 清彦

甲板に墨堤の飛花しきりなり
龍ヶ崎市 小宮 光司

菜の花や戦中のわれ少女たり
春日部市 石原江津子

大草鞋吊る仁王門春夕焼
総社市 風早 貞夫

風船が離れ被爆の空をゆく
対馬市 神宮 斉之

正木ゆう子選

雪解水データセンター循環す
川崎市 多田 敬

【評】情報技術（IT）と人工知能（AI）の時代。データセンターには膨大な電力と冷却水が必要。そこで大自然の雪解水を登場させるとは、何と批評精神に富むアイデアか。げんげ野に坐せば心配さるる身か

神奈川県 中島やさか

【評】蓮華草を愛でていたげんげ野に、具合でも悪いのかと心配された、という句。覚えのある年齢の人間には、とても可笑しくて、共感。気がついて過去が変はりし桜かな

町田市 枝沢 聖文

【評】桜を見ていてふっと、或る人の言葉や行動を誤解していたことに気づく。すべてのことの意味が変わってくる。人生の大切な瞬間。花冷えや馴れねばならぬ車椅子

野田市 高梨昇一郎

たてがみの落花払へばファンファール
川崎市 沼田 広美

春月を回る四人の宇宙船
寒河江市 大谷 正行

耐震の斜交い太し入学す
岡山市 上塚 香

花冷えや今日はもう相撲もなしか
東京都 徳山麻希子

團児らのボールを止める土筆かな
京都府 山田 国雄

桜東風吹いて涙の跡を知る
武蔵村山市 井上香津子

小澤 實選

猫の手を真似ると妻や胡瓜切る
下田市 森本 幸平

【評】この主人公は今までの人生で料理をつくってこなかったようだ。胡瓜を細く切るために胡瓜の上に置く手を猫の手を真似ると妻に指導されている。具体性が魅力である。進級す七十冊の本読みて

流山市 高橋 郁代

【評】七十冊の本読んで、進級するとは、なかなか充実した一年だった。高校生だろうか。選者のぼくもそれくらいは読んでいたはずだ。通過する貨物列車や春暑し

相模原市 はやし 央

【評】通過した列車が貨物列車だったのがいい。ふつうの客車が通過したなら、春暑しとは感じないような気がする。おもしろいところ。七輪を持参してある花筵

横濱市 鈴木 基之

満月や満開桜町に満つ
札幌市 若林 陽光

壁あてに一球投げて卒業す
川西市 藤川 五郎

胡座かき籠編む人や春の風
神戸市 倉本 勉

永き日の「最後の晩餐」を眺む
狭山市 小俣 敦美

鞆の跳びて上京決めにけり
館林市 坂口 穰

花冷えや動く歩道を速歩す
茅ヶ崎市 古田 哲弥

津川絵理子選

鶯の声老若を輝かす
東村山市 鈴木 忠

【評】鶯の声を聞くに誰しも嬉しくなる。囀を聞いて、ハッと顔が明るくなる様子を「輝かす」とは言い得て妙。鶯の輝く命の音が、人間の命を輝かせるのだ。落花一片ハンビロコウの眉間にも

神戸市 田上 勝清

【評】動かない鳥として知られるハンビロコウ。よく見ると花びらが眉間に付いている。こんなところにも、という発見が面白い。風を押しつけて回すや風ぐるま

宮崎市 長友 聖次

【評】子供が風ぐるまを手、風に向かつて走っているのだろう。「押しつけて」がユニークだ。風の手でたえが伝わってくる。ねばならぬ事無き暮らし春の雲

つくば市 横田 和己

草の息足裏で聞いて野に遊ぶ
神奈川県 中村 昌男

玄関の鍵掛けたかな花ミモザ
芦屋市 田中 俊

水温む母の手首の輪つム跡
姫路市 難波 佳代

のど奥に届く嗽や水ぬるむ
東京都 阿部 公代

吊草に若き手の列四月くる
埼玉県 小町 季生

土砥めむばかりに屈み野老掘
府中市 天地わたる

花売る人々

ある料理人とフーリストとのご縁ができて、月に一度渋谷喫花室というイベントを催している。代々木のコンセプトパークを借り、季節を軸に献立を、旬の花々でフーケを仕立て、お通しにはそれらで使われた季節の俳句を添える。未来には選都があつて花筏、凱。

俳句あれこれ

大塚凱（俳人）
それほど興味はなかったが、彼や訪れるフーリストたちと交流するうちに、心が花に動かされるようになった。彼らの表情を見ると、その仕事には、他の仕事には代えがたい魔力があるのだと気づく。花を買い求める人は何かを慈しみ、或いは悦びたいと希う人で、その花を連れていくと、その未来を想像している。だから、花を売る仕事は、多くの者が人生で数十回しか迎えることのできない季節を生き、ちょっと先の未来を手渡す仕事だ。数十回。季節に花があふれて、わたしはちょっとだけ、淋しくなる。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭